

折り返し点2

映画文学人生論

参考；山本周五郎 『青べか物語』 (1962)
『青べか日記』 1928-30)
『愛妻日記』 (1930-41)
『戦中日記』 (1941-45)
山田洋次 『男はつらいよ』 (1969-94)
夏目漱石 『文学論』 (1907)

過去の人生をいかに生きるか

映画文学人生論（映画↓文学↓人生）——第二ラウンドというところで読書が続けていると、また折り返し点にたどりついた。

第二ラウンドでは映画をほとんど観ていない。やや食傷気味になっている。まあ、私にとっては映画は読書の呼び水のようなものだ。おかげで読書の習慣が戻ってきたと考えれば、それでよい。

第二ラウンドの前半では、明治以降の文学作品を対象をしぼり、関連作品五十篇を読んだ。

作者はみんな死んでいる。ほとんど忘れ去られている。そんな化石のような作家たちの小説を今さら読んで何になるのか、とも思うが、それにしても、ゆっくり時間をかけて読書が続けられるという環境に恵まれたことはありがたい。百人煩惱の人情と世態風俗をつづった作品をほんの一読か二読しただけで、心の中で何かが変わったような気がしないこともない。

また、五十篇ないし百篇を大きな群とみなし、全体がお互いにつながっている歴史的大河小説と考えれば、あらたな興味が湧いてくる。

歴史的にみると、時は流れ続けており、人生はまだ終わっていない。人生とは何ぞや。人はなんによつて生きるか。人はいかにして生きるか。ああ、人間はなぜ死ぬのでしょうか。千年も万年も生きたいわ——こんなセリフを口ばしするのは、若者だけではないことを読書によつて確認した。



折り返し点2

映画文学人生論

ただし、若者の人生と高齢者の人生とは時間が違う。若者のいう人生は未来であり、高齢者のいう人生は過去だともいえる。時間とは何か？

私は『青べか物語』の蒸気河岸の先生とささやんととの会話につられて、文学の故郷へ帰る気分誘われた。もちろん人生は一回かぎり、すんでしまったことはとりかえしがつかない。今さら過去の人生を変えることはできないが、その人生を見直す私の意識は読書によって変わることもある。忘れてしまったことを思い出したり、思いがけないつながりを発見したり、森羅万象にひろがりやふくらみをもたせることはできる。がっかりしたり、すこしトクをしたような気にもなる。

ただ、小説の見え透いたフィクション（虚構）はすこし鼻についてきた、ノンフィクションのほうが面白いかもしれぬ。

そう考えて、折り返し点からは、小説とは距離をとり、評伝、評論、随筆、日記などノンフィクションの類を中心に読むことにする。まず、映画篇、文学篇、人生篇という項目をもうけ、それぞれの項目について適当な作品五篇を読む。さらに付け加えて、読書篇、短編篇、中編篇、長編篇、史実篇、天才篇、達人篇という項目についても適当な作品を選ぶ予定。短編篇。中編篇、長編篇、史実篇には小説を選ばざるをえない。

失われた時をまとめて水中花